



## 「金銭出入覚帳」の性格と内容（二）

— 武州荏原郡奥沢村原家文書の事例 —

森 安彦

### 目 次

- |                   |                   |
|-------------------|-------------------|
| 一 はじめに            | 五 一八世紀末期の歴史的状況    |
| 二 原家と原家文書         | 六 安永元年以降の「万覚帳」の記載 |
| 三 奥沢村の歴史概観        | 七 農産物売却の動向        |
| 四 元文元年九月「万覚書帳」の検討 | 八 おわりに            |
- （以上前号）  
  
（以上本号・完）

## 五 一八世紀末期の歴史的状況

小稿では、安永元年（一七七二）「万覚帳」、天明六年（一七八六）「万覚帳」、文化三年（一八〇六）「金銭出入覚帳」の三冊を検討対象としたが、安永元年「万覚帳」には、安永元年正月から天明五年（一七八五）正月までの一四年間が、天明六年「万覚帳」には、天明六年正月から寛政二年（一七九九）正月までの一四年間が、文化三年「金銭出

入覚帳」は文化三年三月から天保一二年（一八四一）正月までの三五年間の、それぞれの記事が包含されているのである。

前二者は「万覚帳」としては、金銭出入のみならず、さまざまな記事が満載されているが、後者は、「金銭出入覚帳」として、金銭の出入が中心で、「万覚帳」のような多岐にわたる記載はみられない点が特色である。

この三冊の中では、安永元年「万覚帳」が最も記事内容が豊富であり、小稿も主として、そこに焦点をあてて論述してみたい。

内容の検討に先立ち、一八世紀末期の歴史的状況について簡単にふれておきたい。

安永元年「万覚帳」と天明六年「万覚帳」に記載されている一八世紀末は、幕藩体制の変質期として捉えられ、諸矛盾が噴出していた。特に天明の大飢饉による農村の衰退と老中松平定信を主導とした寛政改革が実施された時期である。

日本史全体の中での主要な事項を指摘してみると次のことがいえる。安永元年（一七七二）二月には目黒行人坂火事があり、一〇月には銭相場が下落し、水戸や仙台では鑄銭が中止された。同二年（一七七三）九月には鑄銭吹高を減じ、銭相場の引き上げを計っている。同三年（一七七四）一月には米価引き上げ政策、同九月銭相場引き上げ政策がそれぞれとられた。安永六年（一七七七）五月には百姓がみだりに奉公稼に出ることを禁ずる触書が出された。

天明二年（一七八二）の春以降、諸国で洪水が発生し、各地で打ちこわしが始まる。同三年（一七八三）七月浅間山大噴火で天明飢饉の幕開けとなる。同四年（一七八四）多摩郡で穀屋の打ちこわしが行われ、諸国では大飢饉となる。

同六年（一七八六）八月老中田沼意次らが失脚し、松平定信の登場となる。この年も諸国大凶作、関東・陸奥大洪水となる。同七年（一七八七）六月には米買占め禁止令が出され、七月から寛政の改革が始まる。八月には、以後三

か年間の儉約令が出されるが、この年は諸国で大飢饉となる。

寛政元年（一七八九）九月には棄捐令が出され、諸大名に畝米を命じている。同二年（二七九〇）二月には全国に諸物価引下げを命じるが、九月には米価下落につき畝米を奨励した。同三年（二七九一）十一月には畑方の減免願を禁止する。一二月には七分積金による江戸町会所運営が始まる。この年には代官所に手付が設置される。同四年（二七九二）三月には、近世初期以降の名門を誇る関東郡代伊奈忠尊が改易される。同五年（二七九三）は、大豊作のため米価が下落する。同六年（二七九四）一〇月には、今後一〇か年間の儉約を命ずる。同九年（二七九七）九月には相對濟しを命ずる。すなわち金銭訴訟は幕府では扱わないということである。同十二年（二八〇〇）十一月には南鐔二朱銀の鑄造を再開した。この二八年間は、飢饉と儉約令を基調とする時代であったといえよう。

## 六 安永元年以降の「万覚帳」の記載

### （一）安永元年の記事

ここでは、「万覚帳」の記載の中から、興味ある事項を抜粋して紹介してみよう。

まず、安永元年万覚帳からみることにしよう。

安永元年二月には寺子屋に関する記事がみられる。それによると、「入学は辰二月初午（安永元年）」とあり、寺小屋の入学が、二月になって最初の午の日であることがある。この日はまた稲荷神社の祭りの日でもある。寺小屋師匠に対する謝礼手当として次のような記事が続いている。

「本村師匠様節句代ノ覚」として「辰三月朔日、一百文」「五月朔日、一百文 浄心殿」「五月四日、一白米貳升」「七月七日、一百文 浄心様」「外二重一ツ小麦粉」「一、三月重内一ツ、五月同断、九月同断、霜月蕎麦粉」。このように、寺子屋の師匠には三月五月七月十一月の節句に金子・白米・小麦粉・蕎麦粉等を提供していた。ここで浄心殿とあるのは、奥沢本村の浄心坊をさしており、ここで寺子屋が経営されていたことが判明する。

三月八日には、所沢（現在埼玉県）の三八市で、くの木苗五百本を四百文で購入し、市の景況を次のように記している。

右ノ三八市ニて月六度立申候、くのきこならノ苗ハも、の花ひらく次分ニ吉、芋種ハ春中ノ土用次分行か吉、若田なし宿当リ<sup>②</sup>ニ留時は米持参ニ不及、市ニ米沢山下直なり、但し諸事升物山計候、尤芋ハ問屋方持出ル芋宜敷候、是亦雨天ノ時ハ市物不足ニ御座候、茶ノ種ハ秋と芋種次分ニ出候、尤春ハもやし出候へハ夫ヲふるいノ羽ヲ置キノ廻リニふせる也、

とあり、「市ニ米沢山下直なり」とあるのが注目される。

二月二四日には、一八〇文で「しんかうき一札」すなわち「塵劫記」一冊を購入している。「塵劫記」は江戸時代の数学書で、吉田光由著になるもので、寛永四年（一六二七）刊行、入門的・実用的な書で庶民に数学を普及する上で大きな役割を果たしたものである。

二月二九日には、「夜五ツ<sup>（八時）</sup>ニ罷出、朔日ノ晩方罷帰り候、一馬喰町御屋敷、出火見廻ニ上り候、自分・喜兵衛・長右衛門」とある。これは、目黒行人坂火事で馬喰町の代官屋敷へ見舞に行った記事である。

この火事は安永元年（一七七二）二月二九日、目黒行人坂大円寺から出火、麻布・神田・下谷・浅草・千住に及び、江戸市街の大半を焼き翌日鎮火。死者一万四七〇〇人、負傷者・行方不明者は合わせて一万余。明暦の大火と並ぶ

江戸の大火である。

## (二) 安永二年の記事

五月八日に、原家では出火があつたが、「少々故村役中相談ニて訴なし」という次の記事がある。

巳ノ五月八日ノ<sup>午後時</sup>昼八ツ過出火いたし候処ニ袈谷畑ノ衆中村方大勢相集馬や計ニて踏けし、尤大火ニ不成其外ノ家居宅ハ不及申相助申候、

これは、出火の臨場感がよく表現されている。

七月二八日には「我等居宅」として、「梁間三間、桁行七間」すなわち建坪二一坪を、我等と平右衛門・左五兵衛の三人で、「上目黒御鳥見様へ右三間一同二願候」とある。鳥見は江戸幕府の職名で若年寄に属し、將軍の狩獵地を巡検し、鳥の所在を調査する職であるが、鷹場管理の一環として、住居等の建築許可の権限をもっていた。ここでは、安永二年七月に「万覚帳」の執筆者であり、村年寄役新左衛門が、他の二人と一緒に同規模の建坪二一坪の家の建築申請をしているのである。当時の農民の家としては、比較的大きなものであったといえよう。

八月十二日には「普請中雇人覚」が列記されているが、その直前に次の記事がある。

「始ノ

巳八月十一日お十月廿一日ノ終迄

木挽ノ数四拾老入 巳春三拾貳半  
メ七十三人半

手間貳両ト老貫貳八拾八文

巳ノ八月六日ノ新立お上やり迄大工百人

「金銭出入覚帳」の性格と内容 (二) (森)

右ハ渡シ分

とあり、木挽七三人半、大工一〇〇人という大規模なものである。

九月には、棟上の記録がみえ、「十一日棟上ノ祝義、米貳斗ニ壹貫文、木綿老反其外肴酒」とある。家普請関係記録としては貴重なものといえる。

(三) 安永三年の記載

二月一日には、酒一升を一〇〇文で購入し、「右は本村浄心様へ市之介入学ノ印」として提供している記事がある。これも浄心坊の寺子屋への入学の時のことである。

二月一日も初午に当るのではないだろうか。

一〇月三日には、「一貳拾七文 本村名主殿隠居ニ付跡役幸二郎家督之祝義代」とある。名主が隠居して、跡役として、幸二郎が家督を継いだことに対する祝義代として錢二七文を提出したことが判明する。

(四) 安永五年の記載

安永五年（一七七六）の日光社参の記事が次のようにみられる。

申四月日光御社参ニ付深沢組千八百石余へ名主貳人、組合惣代下沼・深沢ニて古河へ詰、名主老前五両、池尻組・かすや組・深沢組ニて名主五人、供老三人三両

日光社参とは、江戸時代、將軍の日光東照宮への参詣をいう。徳川家康の命日にあたる四月一七日の祭礼にもうでる。將軍の権力を誇示する目的もあつた。初期には秀忠が四回、家光が一〇回、家綱が二回と頻繁に行われたが、そ

れ以降では、吉宗、家治、家慶だけである。日光道中を片道三泊四日の道中であつたが、大勢の大名・旗本が供をする大規模な行列で、沿道の村々には過重な助郷が課された。この記事は、一〇代將軍徳川家治の日光社参のときのものであり、世田谷領村々の名主が供をつれて社参に参加していたことが判明する。その費用として名主一人につき五両、供一人につき三両を要した。

#### (四) 安永八年の記載

安永八年（一七七九）四月二日に浄真寺所持の年貢地林の内で首縊死人が発見された記事が次のように記載されている。

安永八刻四月十一日夜五ツ時前<sup>（午後八時）</sup>、当村浄真寺所持之御年貢地林之内首縊死候人有之、当村□人夜廻りニ罷出見付村役人へ為相知候ニ付、早速御役所へ御訴申上御検使被下置御見分之上三日た、し札立可置旨被仰付、尤十三日お十五日迄昼夜番人付置候、同十六日ニ仕廻是又御役所へ御訴申上被仰付候上、右之入用訳々金式両御役人様、田中左右馬様御さかな代式朱御供（以下略）

この首縊死人の取り扱いの仕方が判明するとともに、その措置に要した費用や昼夜の番人数が判明する。こうした場合の費用負担の方法は先例を調べて実施した。そのことが次のように記載されている。

名主喜左衛門殿同十七日朝毎々ノ議定□取出し見候処、明和八卯六月事□雑用之義ハ三分一家並残三分二ノ□高割ニ相極候間此度ノ義も右之通ニ□割直し候、  
右之雑用高三ツ割一ツ分九貫九百文ほと家並割、此節村越石共家数百十四□老軒前八十七文残二ツ分十九貫八百文三百九十式石ニ割、石ニ付五拾六文割



尤右極二候二付名主も一同二出し候、

これによると、先例として、これまでの議定書を調べたところ、明和八年（一七七二）六月に、その事例があり、それによると負担の方法は、家数割と石高割の併用制で、総費用額の三分の一が家数で割り、残りの三分の二が石高割で負担する方法がとられていた。それによると、家数割は一軒につき八七文、石高割は一石につき五六文ということになる。それ故、百姓は、まず一軒分として八七文、それに自己の持高に応じて、五六文に石高を掛け算した額、それらを総計した額が負担総額となるのである。このように家数負担と石高負担の併用制によって負担の均等化を計っているのである。今日の古文書も江戸時代にあつては、当時の現用文書記録であり、日常的に名主らは、いつも、それらの文書を繕いて農政に活用していたことが判明する。

#### （六）天明三年の記載

奥沢村における天明飢饉の実態はどのようなものであったのだろうか。

天明三年（一七八三）十一月二日に、次のような作物が水腐につき冬成年貢の残金の日延願いが代官所に提出されている。

乍恐以書付奉願上候

一荏原郡奥沢村年寄新左衛門申上候、当卯冬御成箇金之義当卯作物水腐二付取集り不申、仍之村役人共差働今日漸々御成箇金七両三分上納仕候、残金之義来晦日迄御日延御願申上候、以上、

天明三卯年十一月廿二日

伊奈半左衛門様

御役所

年寄新左衛門は、この文書の所蔵者である原家であり、新左衛門が伊奈半左衛門代官所に宛て、天明三年の冬年貢は、長雨により作物が水腐となり、収穫がなく取り集めることが困難で、本日、すなわち十一月二二日にやつと年貢金七両三分を上納したが、残金は十一月晦日まで上納を延期させてほしいという願書を提出したのである。

まず長雨による自然災害で農作物に多大の被害が発生していたことが判明する。

このことは、次の記事によつて一層具体的に知ることができる。

天明三卯夏より冬迄長雨にて諸作不宜卯秋より辰四月上旬迄大麦相場両二六斗位、稗百文二式升、大豆九合、米八五合五勺六七合、大麦稗等ハ相場計にて売買不自用、銭は五貫六百文ほと

凶作は物価高騰を生み出していたことがわかる。

(七) 天明四年の記載

天明四年（一七八四）五月六日には、夫食（食糧）拝借願の記事がみられる。

御普請役平田恵重郎様登り戸村御旅宿迄被寄候ハ、去ル<sup>天明三年</sup>卯秋より不作依辰春中夫食拝借之書付差上候、高四百七石

三斗七升七合奥沢村家数百貳軒惣人数四百五拾五人内四十宅人才覚人残四百十四人

金九両永百十五文四分夫食

右之通夫食拝借奉請取候

荏原郡奥沢村

名主喜左衛門無印

これによると、奥沢村の惣人口四五五人の内、知恵をはたかせ自分で暮らせるものは四一人(九・一%)、残り四一人(九〇・九%)は生活が維持できず、彼らに対しては、金九兩永一一五文四分の夫食代金が貸与されているのである。すなわち、村人の大半は夫食の借用を必要としていたのである。これより先の天明四年二月二六日より夫食の割り渡が実施されていたのである。

一 錢五百四拾五文 喜左衛門殿方請取、是ハ来ル巳方酉迄(天明五年)五ヶ年賦(寛政元年)

右は去ル卯年水難ニて夏秋作不宜、仍之御願申上扶食拝借被仰付辰二月廿三日ニ御貸し渡被下置候、小前老人(天明四年)

前永拾九文九分、但老人前百九文ツ、

一 四百五十五人内四十老人夫食才覚人除、残四百拾四人内男百五十九人女貳百五十五人

前述の記事を補足するものといえよう。これを見ても男より女の方が夫食を必要とする数の多いことが注目される。「天明四年辰七月九日夏作御見分ニて御普請役蓮見春次郎様御料所村々御廻り候」とあり、夏作の状況見分として普請役が天領の村々を廻村していることが判明する。

(ハ) 天明五年の記載

天明五年(一七八五)三月二日には、名主喜左衛門が退役し、その後任等の記述がみられる。

天明五巳三月廿一日喜左衛門殿へ退役跡名主役要蔵并市郎右衛門年番二被 仰付候、但要蔵幼年故十八才二相成候迄市郎右衛門後見

喜左衛門が名主役を退役し、その後任には、要蔵と市郎右衛門が年番で勤務することとした。喜左衛門の倅要蔵は

幼年なので、要蔵が十八歳に成長するまでは、市郎右衛門が後見となることを定めている。

(九) 天明七年の記載

天明七年（一七八七）は諸国大飢饉で各地で惨状が続出し、また打ちこわしも激化した。打ちこわしの取締りに関する触書が次のように出されている。

覚

此節江戸町々者共昼夜之無差別数拾人ツ、手組米屋并商人家江踏込理無尽諸道具假米金紛失茂有之由、全盜賊等入交為騒立儀と相聞、仍而は此上村内江踏込候儀も難計ニ付、手簡究置如何様手騒致候とも取鎖早速其役可訴出候、勿論村内之者共別而村役人共取メリ致、右躰不法之義無之様可致候、此触書披見之上触下村々不洩様申聞心得違無之様可取計候、早々刻付ヲ以順達留リ可相返者也

半左

五月五日 役所

右之通御触出候間其御村々江相廻し候、御拝見之上村下ニ御印形被成早々順達留り村々御返し可被成候、以上、

深沢村

五月廿九日

触次又兵衛

村々名主年寄中

この法令は天明七年（一七八七）の江戸の打ちこわしに関連して出されたものである。これは江戸で跋扈している盜賊等が村内に踏込んでくる可能性もあるので、村内の警備体制を強化することを命じたものである。江戸の打ちこ

わしが周辺村落に波及することを恐れて対策を講じたものである。

(十) 寛政四・五年の記載

寛政四年（一七九二）三月には関東郡代伊奈半左衛門が知行を召し上げられ、荏原郡支配が大貫次右衛門になったことが次のように記載されている。

寛政四子三月

御触 御鷹御用掛り之義は伊奈右近将監懸り候所、今般御勘定所御引請ニ相成御代官出役御勤之趣候、

同子三月

御触 去亥十一月検見先ニ而伊奈半左衛門出郷いたし、右近将監御知行被召上板倉周防守江御預ケ

伊奈小三郎様は新規千石被下右近将監養子ニては無之、

同年子六月中御郡代は

久世丹後守様 御代官は

大貫次右衛門様 荏原郡支配

伊奈忠尊は江戸後期の関東郡代であり、通称半左衛門。摂津守、右近将監。天明の飢饉の時、江戸の窮民救済などで活躍する。家事不行届を理由に改易され、伊奈氏の関東郡代の世襲はおわった。

寛政五年（一七九三）一二月一五日には、世田市にて農具や籠を買っている記録がある。

## 七 農産物売却の動向

安永元年「万覚帳」は、前述したように、安永元年（一七七二）正月から天明五年（一七八五）正月までの一四年間の記事を含むものであり、記述も最も充実している。ここでは、この安永元年「万覚帳」の記載の中から、特に農産物の売却の動向を検討してみることとする。

なお表はすべて本節の末にまとめて掲載した。

〔表1〕は安永元年から天明五年までの農産物売却を一覧表にしたものである。

〔表2〕は〔表1〕から主要農産物売却高を整理したものである。

〔表3〕は年代別に農産物売却高を整理して表示したものである。

〔表4〕は農産物の品目ごとに売却高を示したものである。

〔表5〕は明和五年（一七六八）から寛政四年（一七九二）までの銭相場の推移を表示したものである。〔表3〕〔表4〕の金を銭に換算した際には、この〔表5〕の数値によった。

以上の表から指摘できることを以下箇条書きで述べることにする。

① 〔表3〕年代別農産物売却高からいえることは、売却高がもっとも高かったのは、安永五年の銭四四貫一五六文、次いで安永元年の銭四三貫八四七文であり、もっとも低かったのは安永七年の銭六貫四三五文である。

概していえることは、安永元年から同五年までは、売却高は高水準であったが、安永六年以降天明五年までは、銭一〇貫文台と低くなっている。これは自然災害などで農作物収穫が大幅に減少したためではなからうか。

② 安永元年から天明五年までの農産物の品名ごとの売却高をみると、もつともよく売られていたのが小麦で、銭に換算して、一一四貫一五七文で、総額の三六パーセントを占めている。次いでよく売られているのが米で銭四三貫一六五文で総額の二三パーセントである。小麦と米で売却農産物の半分を占めていることが判明する。このほか、蕎麦・大豆・粟・大麦・稗等の雑穀類がこれについている。前栽類も大根・茄子・芋・瓜・牛房・それに少量だが黒胡麻・かうじ・菜種・小豆・黒さざげ等も売却されている。

③ これらの売却先をみると、まず小麦では、江戸の広尾町(現在、港区)、魚籃前<sup>11</sup>三田台裏町(現在、港区)等が判明するが、周辺村では雪ヶ谷村(現在、大田区)がみられる。このほか、猿町、六軒茶屋、台町、式本榎等の地名がみられるが、それらの現在地名は未確定である。

米は、餅白米・糯米・米の三種類の書き分けがなされているが、売却先は、猿町吉兵衛、大崎市右衛門、角左衛門、雉子宮市右衛門、目黒大島前米屋等である。

米の売却で注目されるのは、天明大飢饉の時のことである。天明三年一〇月一七日に米六斗七升五合を金一両八八二文で目黒大島前米屋へ売却している。前年の天明二年三月一六日には、米九斗六升を金一両で雉子宮市右衛門へ売却しているが、天明三年の場合は、約二倍近い高値で米が売却されているのである。天明四年六月九日には米六斗五升が金二分二朱で売却されており、天明二年段階に戻っていることが判明するのである。

前栽物の販売先をみると、葉大豆は市右衛門、等々力与三郎であり、村内か隣村の者たちである。牛房・大根は品河(川)の宿場へ出荷している。干大根は木挽町やぎふ(柳生)様、三田髪結、三田伊左衛門等へ出荷している。蕎麦の売却先は、太郎兵衛、永峯太郎兵衛、六間茶屋太郎兵衛とあり、この三人の太郎兵衛は、同一人物とも考えられる。

〔表1〕安永1年～天明5年 農作物売却一覧

(安永元年「万覚帳」より作成)

年	月	日	作物	数	量	代金	販売先	備考
安永1	10	20	葉大豆	60把		金2分	市左衛門	代金11月12日受取る
	7	12	黒さざげ	4升4合		200文		
	5	8	葉大豆	14把		金2分		
	5	16	葉大豆	11把				代金5月21日受取る
	6	18	蕎麦	1斗6升2合		470文		
	8	4	大豆	4斗		1貫816文		100文に付2升2合かへ
	8	14	大豆	1斗9升5合		(886文)		100文に付2升3合かへ
	8	14	大豆	9升8合		(426文)		100文に付2升4合かへ
	9	12	餅粟	3斗3合		2貫328文	目黒	100文に付1升3合かへ
	9	13	餅粟	3斗1升6合		2貫435文	目黒	100文に付1升3合かへ
	9	29	小麦	1石3斗1升6合		金1両、75文		さるノ左平治にて伊三郎払1石7斗かへ
	10	22	蕎麦	3斗1升8合		1貫590文	太郎兵衛	2升かへ
	10	30	小麦	9斗1升5合		金2分、342文	さる町左平治	両1石6斗2升かへ
	10	30	小麦	1石8斗7升		金1両、852文	六軒茶や太郎兵衛	両1石6斗1升かへ
安永2	12	11	餅栗	5斗4升5合		金2分1貫218文	さる町吉兵衛	両7斗5升かへ
	12	29	芋	1荷半		1貫500文		100文に付5升余
	12		牛房			3貫723文	品河	
	12		大根			3貫314文	品河	
	12	26	土芋	1荷		472文	さる町吉兵衛	
	1	8	芋	1荷		524文	しや木善	



安永2	1	9	芋	1 荷	512文	しや木善	
	1	11	芋	1 荷	524文		
	閏3	10	大麦	6 斗5 升	金1 分		
	閏3	26	荒麦	6 斗6 升	金1 分		
	5	16	小麦	3 斗6 升	1 貫125文		
	5	16	小麦	7 斗2 升	金1 分853文		
	6	16	小麦	5 斗4 升	金1 分300文		
	11	21	葉大豆		金1 分		
	11	26	小麦	3 斗	1 貫100文		
	12	16	餅栗	8 斗4 升3 合	金2 分652文		
	12	21	餅白米	3 斗	1 貫360文		
安永3	2	3	麦	4 斗6 升	700文	新家 源五兵衛	
	4	11	荒麦	9 斗	金1 分		
	5	3	はだか麦	4 斗	952文		
	5	19	はだか麦	4 斗6 升1 合	1 貫76文		
	5	2	小麦	9 斗	3 貫600文		
	6	2	あわ	6 升1 合	234文		
	6	16	小麦	8 斗3 升	金2 分143文		
	6	16	小麦	7 斗9 升	金1 分13匁7 分2 厘		
	8	17	早稲大豆	9 斗5 升	2 貫586文		
	8	27	黒胡麻	9 斗9 升5 合	1 貫550文		
	9	20	糯米	7 斗	2 貫976文		
	9	23	糯米	6 斗9 升5 合	3 貫20文		

但し1貫280文  
 100文に付3升2合かへ  
 両に1石7斗4升かへ  
 両に1石7斗4升かへ  
 100文に付2升9合かへ  
 100文に付2升4合5勺かへ  
 両1石2斗8升7合5勺かへ

100文に付4升2合かへ  
 100文に付4升23合かへ  
 100文に付2升5合かへ

内1分は伊三郎方へ取る  
 石5斗1升かへ  
 石6斗5升かへ

100文に付2升9合かへ  
 100文に付1升9合かへ  
 100文に付2升3合5勺かへ  
 100文に付2升3合かへ

安永 3	9	27	糯米	2 斗	800 文	目黒正月や	100 文に付 2 升 5 合かへ	伊
	10	1	蕎麦	6 斗余	2 貫 50 文		100 文に付 2 升 8 合かへ	
	11	8	蕎麦	4 斗 5 升	2 貫 24 文		三郎へ渡す	
	11	8	蕎麦	1 斗 9 升 6 合	580 文		100 文に付 2 升 7 合かへ	
	10	25	岡糯	6 斗 1 升	金 2 分 140 文		石 1 斗 6 升かへ	
	12	26	洗芋	3 荷	1 貫 216 文		100 文に付 78 升	
	12	29	洗芋	1 荷	412 文			
	12							
	12							
	12							
安永 4	5	13	はだか麦	4 斗 3 升	900 文	台町腐や 下沼善六	100 文に付 4 升 7 合かへ	
	5	15	はだか麦	5 斗	1 貫		100 文に付 4 升 6 合かへ	
	5	24	はだか麦	3 斗 8 升	904 文		4 升 2 合かへ	
	6		小麦	8 斗 1 升 5 合	金 2 分 135 文		両に 1 石 5 斗 5 升かへ	
	7	2	黍黄	2 石 8 斗 1 升	金 2 両 3 分 銀 259 文		両に 1 石 5 斗 6 升かへ	
	9	9	黒胡麻	1 斗 1 升 5 合	741 文	さる町吉兵衛	100 文に 1 升 5 合 5 勺かへ	
	9	22	餅粟	4 斗 1 升 8 合	2 貫 200 文		100 文に 1 升 9 合かへ	
	10	10	蕎麦	2 斗 1 升	810 文			
	10	16	蕎麦	2 斗 4 升	732 文			
	11	17	餅米	2 斗 4 升 5 合	1 貫 223 文		両に 石 8 升かへ	
安永 5	12	21	団子芋	4 荷	1 貫 960 文	等々力与三郎	22 日残り 1 貫 200 請取る	
	2	24	葉大豆	57 把	金 2 分 1 貫 290 文		両に 80 把かへ	
	3	12	荒麦	8 斗 3 升	金 1 分		南ノ伊左衛門	
	5	14	小麦	1 石	金 2 分 944 文		台町升や七兵衛	
	5	17	麴	9 斗 8 升	金 2 分 822 文		台町升や七兵衛	

安永 5			麴 桑瓜 茄子	9 斗 8 升 5 合	金 2 分 874 文 10 貫 余 10 貫 490 文 程	台町 升 や 七 兵 衛	1 石 5 斗 かへ 申年惣ノ 申年 8 月 6 日迄ノ 100 文に付き 3 升 2 合 かへ 三田伊左衛門世話
	11	5	蕎麦	8 斗 9 升	2 貫 875 文	木挽町 や き ふ 様	三田伊左衛門世話
	11	22	干大根	400 本	1 貫 200 文	三田髪結床	三田伊左衛門世話
	11	22	干大根	300 本	750 文	三田伊左衛門	三田伊左衛門 元文 2 年 11 月 30 日「茄子覚帳」にあり 11 月初より 20 日過迄に
	11	22	干大根	200 本	500 文		
	12	2	生大根	10 駄、100 本	200 ~ 250 文		
			大根	250 本	472 文		
			大根	250 本	500 文		
			大根	250 本	500 文		
			大根	200 本	364 文		
安永 6	2	28	たん子芋	1 荷	450 文	さる庄兵衛	両に石 3 斗 8 升 かへ
	4	20	黒米	5 斗 6 升	400 文	ひろふ玉川治右衛門	両に 3 斗 8 升 かへ
	5	14	小麦	7 斗 9 升 8 合	金 2 分 440 文	ひろふ玉がわ治右 衛門	
	5	15	小麦	7 斗 9 升 6 合	金 2 分 432 文	ひろふ油や左兵衛	
	5	16	小麦麴	6 斗 9 升	金 2 分	台町 升 や	石 8 斗 かへ
安永 7	6	15	小麦	5 斗 5 合	金 1 分 3 匁 9 分 3 厘	長兵衛	石 6 斗 かへ
	8	12	大豆	3 斗 5 合	1 貫 100 文	猿町 左 平 次	100 文に付 2 升 8 合
	11	9	小麦	3 斗 9 升	金 2 朱 632 文	三田髪結	石 6 斗 8 升 かへ
	11	19	干大根	300 本	900 文	三田伊左衛門弟	
	11	19	干大根	100 本	280 文		

安永7	12	12	団子芋 団子芋	1荷 1荷	424文 472文	又兵衛 兵右衛門	
安永8	5	10	はだか麦 小麦 大豆	1斗9升5合 1石6斗3升 3斗4升5合	514文 金3分40文 1貫150文 1貫105文	さるノ佐平次 村長兵衛 目黒	100文に付3升8合かへ 両に2石1斗かへ 100文に付3升かへ 100文に付1升9合かへ 100文に付1升9合かへ、金1歩請取る 100文に付2升5合かへ 100文に付1升2合かへ
	6	2	粟	2斗1升	6貫余	大崎市右衛門	
	8	10	蕎麦	5斗3升	2貫150文	永峯太郎兵衛	
	9	26	もち白米	1斗1升	900文		
	10	1					
	10	21					
	12	21					
安永9	2	30	稗 大麦	1石5斗5升 5斗3升	金2分 金2朱	左二右衛門 岡右衛門	代6月20日 稗と合わせて済 代6月20日済、大麦と一括 代7月3日済
	3	12	稗	7斗8升	740文	岡右衛門	
	3	12	稗	8斗	740文	源左衛門	
	3	16	かうじ	5斗3升2合	金1分1貫141文	尾山清五郎	両に石2斗かへ
	6	11	小麦	8斗	金1分940文	魚らん前麩や六 左衛門	両に石9斗8升かへ
	7	13				長兵衛	
	8	7	早稲大豆	4斗7升	金1分685文		100文に付2升1合かへ
	9	13	早稲大豆	7升	350文		
	9	13	黒胡麻	5升8合	340文		
	10	24	蕎麦	4斗1升	1貫24文		
	10	24	蕎麦	2斗5升6合	638文		
	10	24	蕎麦	8升2合	400文	角左衛門	
	12	19	糯米				
安永10	4	22	荒麦	4斗5升外少々	800文	源左衛門	
天明1	4	25	荒麦	4斗5升	金2朱 (786文)	吉右衛門	
	5		荒麦	2斗7升	金2朱 (788文)	岡右衛門	

天明 1	5	3	荒麦	4 斗 5 升	銀 2 朱	久兵衛	
	5	10	餅白米	7 升 8 合	580 文	藤五郎	
	5	20	菜種	1 斗 2 升 7 合	701 文	魚らん前ふや六左衛門	石 4 斗 8 升かへ
	閏 5	5	小麦	4 斗 1 升	金 1 分 164 文		
	閏 5	26	蕎麦	6 升 4 合	213 文	長兵衛	両に石 8 升かへ
	6	3	米	8 斗 1 升	金 3 分	六間茶や太四郎	
	6	22	早稲大豆	8 升	400 文	六間茶や太四郎	両に石かへ
	8	7	米	1 斗 3 升 5 合	金 2 朱 62 文	六軒茶や太郎兵衛	
	8	9	梗粟	2 斗 8 升 5 合	813 文	三田髪結	
	10	6	蕎麦	5 斗 3 合	2 貫 200 文		
天明 2	11	21	干大根	700 本	2 貫 780 文	雄子宮市右衛門	
	3	16	米	9 斗 4 升外きれ 1 升	金 1 両	長兵衛	100 文に 1 升 6 合かへ
	5	1	早稲大豆	7 升 8 合	484 文	式本榎ふや七兵衛	両に石 4 斗 4 升かへ
	5	19	小麦	7 斗 1 升	金 1 分 1 貫 584 文	雪ヶ谷市三郎	両に石 5 斗かへ
	7	29	小麦	1 石 1 斗 7 升 7 合	金 3 分 312 文	三田髪結	
天明 3	12	11	干大根	520 本	1 貫 900 文	長右衛門	
	3	25	馬大豆	1 斗 3 升	700 文	魚らん前六左衛門	
	6	11	小麦	5 斗 5 升 7 合	金 1 分 237 文	ふや七兵衛	100 文に付 2 升 4 合かへ
	6	15	小麦	4 斗 2 升	金 1 分 152 文	式本榎遠州屋	石 3 斗 2 升かへ
	6	21	小麦	2 斗 6 升	1 貫		
	6	29	小麦	7 斗	金 2 分 176 文		
	9	18	早稲小豆	2 升 5 合	227 文	目黒大島前米や	両に 5 斗 9 升かへ
	10	17	米	6 斗 7 升 5 合	金 1 両 882 文		1 升 7 合かえ
	11		蕎麦	2 斗 3 升 5 合	1 貫 378 文		

天明 3	11 12	5 5	蕎麦 干大根	7 升 8 合 300 本	400 文 900 文	三田式町田髮結	
天明 4	1 6 9 10	9 9 9 9	稗 小麦 米 蕎麦	8 斗 8 斗 9 升 6 斗 5 升 6 斗 3 升	金 2 分 金 1 両 158 文 金 2 分 2 朱 2 貫 624 文	六軒茶や太四郎 六軒茶や二郎兵衛	両に石 6 斗かへ 両に石 9 斗 7 升 100 文に付 2 升 4 合かへ
天明 5	6 7 10 12	12 24 26 1	蕎麦 小麦 蕎麦 大根 干大根	1 石 4 斗 5 升 1 斗 4 升 5 合 3 斗 3 升 650 本	金 1 両 1 分 800 文 1 貫 900 文 2 貫 980 文 2 貫 872 文	喜右衛門 新右衛門 芝三田式丁田髮結 新右衛門	両に石 1 斗 6 升かへ 両に石 1 斗 6 升かへ

## 〔表2〕安永1年～天明5年 主要農産物売却高

(安永元年「万覚帳」より作成)

年代	売却高 上金、下銭	品名										
		小麦	米	蕎麦	大豆	大根	栗	麦	茄子	稗	芋	その他
安永 1	4両 21貫447文	2両2分 1貫289文	2分 1貫218文	2貫60文	1両 3貫128文	3貫314文	4貫763文				1貫500文	牛房(4貫195文) 黒 ささげ(200文)
2	2両 6貫950文	2分 3貫378文	1貫360文		1分		2分 652文	3分			1貫560文	
3	1両2分 24貫96文	3分 3貫780文	140文	4貫654文	2貫586文		7貫30文	1分 2貫728文			1貫628文	黒胡麻(1貫550 文)
4	3両1分 10貫864文	3両1分 394文	1貫223文	1貫542文	2分	2貫200文	2貫804文	1分			1貫960文	黒胡麻(741文)
5	2両1分 31貫781文	1両2分 2貫640文		2貫875文	1貫290文	4貫486文			10貫490文			瓜(10貫)
6	1両2分 1貫722文	1両2分 872文	400文							450文		
7	1分2朱 4貫185文	1分2朱 1貫9文			1貫100文	1貫180文				896文		
8	3分 12貫59文	3分 40文	6貫900文	2貫150文	1貫150文	1貫105文	514文	2朱				
9	1両1分2朱 6貫997文	1分 940文	400文	1貫662文	1分 685文			1分	2分 1貫480文			黒胡麻(340文)からし(1分 1貫140文) 小豆(330文)
天明 1	8両713文	1両1分2朱 164文	3分2朱 642文	2貫413文	400文	2貫780文	813文	800文				菜種(701文)
2	2両 4貫282文	1両 1貫898文	1両		484文	1貫900文						
3	2両 6貫52文	1両 1貫565文	882文	1貫778文	927文	900文			2分			
4	2貫782文	1両 158文	2分2朱	2貫624文								
5	2両1分2朱 8貫552文	1両1分 800文	2分2朱	1貫900文		5貫852文			2分			
合計	26両2分4朱 150貫482文	15両3分2朱 18貫907文	5両 13貫165文	23貫658文	2両 11貫750文	20貫412文	2分 16貫563文	1両2分2朱 6貫846文	10貫490文	1両2分 1貫480文	7貫994文	

〔表 3〕 年代別農産物売却高

年代	売却高					貫高換算	
	両	分	朱	貫	文	貫	文
安永1	4			21	447	43	847
2	2			6	950	17	950
3	1	2		24	96	32	496
4	3	1		10	864	28	414
5	2	1		31	781	44	156
6	1	2		1	722	10	422
7		1	2	4	185	6	435
8		3		12	59	16	559
9	1	1	2	6	997	15	659
天明1	1	1	2	8	713	17	788
2	2			4	282	16	682
3	2			6	52	18	052
4	2		2	2	782	15	107
5	2	1	2	8	552	23	989
合計	26両	2分	4朱	150貫	482文	307	556

(資料) 安永元年「万覚帳」



〔表4〕安永1年～天明5年 農作物売却一覧

農産物	売却高					貫高換算		%
	両	分	朱	貫	文	貫	文	
小麦	15	3	2	18	907	114	157	36.0
米	5			13	165	43	165	13.0
蕎麦				23	658	23	658	7.6
大豆	2			11	750	23	412	7.5
大根				20	412	20	412	6.5
粟		2		16	563	19	568	6.2
麦	1	2	2	6	846	16	596	5.3
茄子				10	490	10	490	3.3
瓜				10	000	10	000	3.2
稗	1	2		1	480	10	480	3.3
芋				7	994	7	994	2.5
牛房				4	195	4	195	1.3
黒胡麻				2	631	2	631	0.8
かうじ		1		1	140	2	640	0.8
菜種					701		701	0.2
小豆					350		350	0.1
黒ささげ					200		200	0.1
合計	26両	2分	4朱	150貫	482文	310	982	100.0

(資料) 安永元年「万覚帳」

〔表5〕 銭相場の推移〔金1両につき〕

(元文元年九月「御年貢上納万帳」より)

年	月	日	貫	文	年	月	日	貫	文
明和5	6	22	4	460	安永9	8	20	6	300
	8	20	4	360		11	20	6	104
	12	2	4	360	天明1	6	21	6	600
	6	22	4	800		8	20	6	600
	8	20	5	000		11	20	6	600
	12	□	4	900	2	6	20	3	051
	7	6	5	400		8	20	6	200
	8	29	5	600		11	20	6	200
	8	1	5	400	3	6	21	6	000
	8	3	5	400		8	20	5	500
	12	12	5	050		11	21	5	800
安永1	6	21	5	600	4	6	21	5	800
	8	21	5	750		8	20	5	900
	10	3	5	450		11	21	6	300
	2	6	5	550	5	6	21	6	500
	8	21	5	450		8	20	6	500
	11	21	5	500		11	21	6	600
	3	6	—	—	6	6	21	6	500
	8	20	5	600		11	21	6	050
			5	300	7	6	21		
	4	6	5	300		8	20		
	8	20	5	400		11	21	5	800
	11	20	5	400	8	6	21	5	800
寛政1	5	6	5	500		8	20	5	900
	8	19	5	500		11	21	6	000
	11	20	5	550	寛政1	11	16		
	6	6	5	800		2	6	6	000
	8	20	5	800		8	21	6	000
	11	21	6	000	3	11	20	6	000
	7	6	6	000		6	21	5	200
	8	20	5	900		8	21	5	450
	11	21	5	950	4	11	21	5	600
	8	6	6	000		6	21		
	8	20	6	150		8	20	5	600
	11	21	6	200		11	20	5	700
9	6	20	6	300					

## 八 おわりに

最後に、これら「万覚帳」「金銭出入覚帳」などから判明した事柄を列挙してみると、次のことがいえる。

- ①「御年貢上納万帳」の内容が盛り込まれており、夫食・拝借金などの動向が判明する。
- ②助郷・国役金の記録、その他、村役人の役目上の雑費や小遣金の動向。
- ③出生、三ツ目、七ツ目、結婚、離縁、養子縁組、死亡など人の一生に関する記述が豊富である。
- ④本書の作成者は、年寄（組頭）役を勤務しており、その立場から組内は勿論村内の人々の動向も判明する。新築、屋根葺替、地所譲替、家督相続など。
- ⑤農産物の売却のほかに材木・真木の売却がある。安永元年から天明五年までの農産物売却高は〔表1〕から〔表4〕までに示した通りである。

- ⑥金銭・作物の貸借、質入、古物売却、無尽など金銭の融資に関する記述や銭相場・米相場に関するものが目立つ。
- ⑦触書・達などの書留、嘆願書などの控え。

- ⑧村内の事件・事故・紛争など。

- ⑨原家の動向としては、安永期（一七七二―一七八〇）は家普請をひかえ積極的経営、販売に意欲的であったが、母・妻の死去時の出費が少なくなかった。天明期（一七八一―一七八八）には甚之介が若くして死去している。この時期は経営が悪化している。

以上のように社会的動向と村政・家の経営の関係が分析方法によつては、解明できる可能性があり、これらは、貴

重な史料であり、歴史情報資源といえる。

〈附記〉

小稿は『世田谷区史料叢書』第一二巻（東京都世田谷区教育委員会、一九九七年三月発行）に収録した「金銭出入覚帳」の拙稿の解説論文を増補改稿したものである。本叢書の編集・刊行を担当された世田谷区立郷土資料館、とくに区専門委員池上博之氏には種々お世話になった。

なお拙稿の作成に当たっては、奥田和美氏のご協力を得た。いずれも記して感謝の意を表したい。